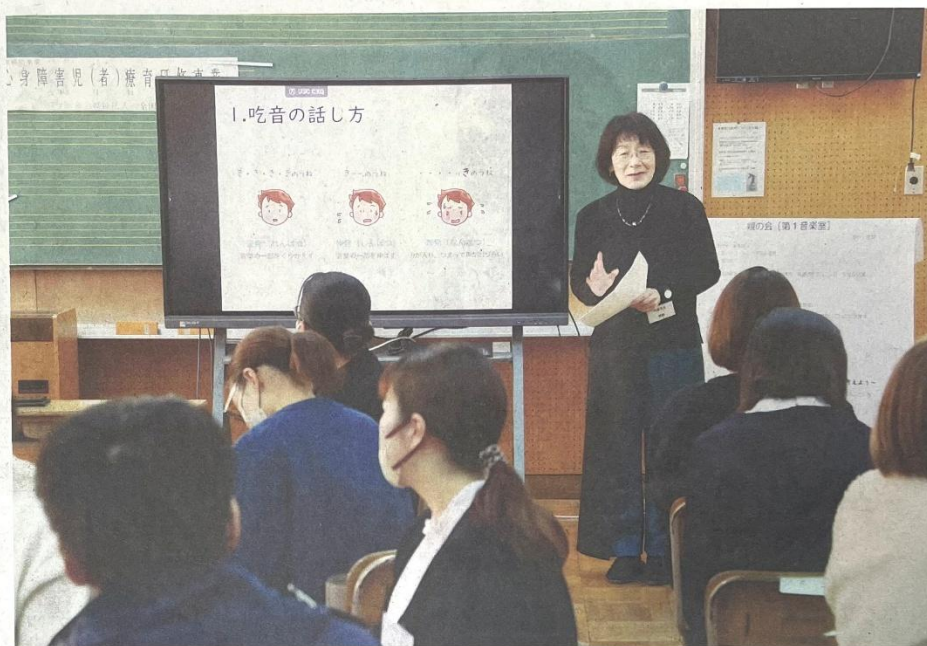


理解深め、学び続けて

中野小で
吃音学習会

大人向けに吃音について説明する内藤さん

県特別支援教育研究連盟
難聴・言語障害教育部会の
第1ブロックは1日、吃音
学習会を中野小学校で開い
た。吃音のある子どもたち
を支える大人、児童が集え

る機会を、2011年から
開かれているもので、大人
の会には約40人、子どもの
会には小中学生19人が参加
し、理解を深めたり交流し
た。

吃音は、言いたいことが
頭に浮かんでいるのに言葉
がスムーズに出せない症状
で、一般的に「どもる」と
も言われる。子どもを支え
る大人の会には、第1ブロ

ックの飯山、中野、須坂小
学校に併設されている「こ
とほの教室」に吃音で通級
する児童の保護者、吃音に
関心を持つ教員、保育士、
保健師、入学前相談に関わ
る教育委員会担当者が参
加。神楽岡クリニック（松
本市）の言語聴覚士の内藤
麻子さんと、吃音の当事者
の皆川裕己さんが講演し
た。

内藤さんは、吃音の話
方として「き、き、昨日ね」
のように言葉の一部を繰り返
す「連発」、「きーのう
ね」と言葉の一部を伸ばす
「伸発」、力が入り詰まって
声が出づらい「難発」があ
ることを紹介。原因が緊張
やストレスと考えがちだが
まだ分からないこと、周囲
の何気ない悪意のない疑問
や助言が吃音のある子ども
にとって指摘となつてしま
い、症状悪化につながつて
しまふことも解説。支
える大人も理解を深め、一
緒に学び続けていくことの
大切さを説いた。

皆川さんは、幼稚園に通
う頃、誕生会で自分の誕生
日がわかっていないのに言え
なかったことで吃音に気づ
いたといい、小学校に上が

つて以降も教科書の音読が
うまくできず友達に真似を
されたり、うまく話せない
ことを教師に明かしたが
「同じようにできているか
ら大丈夫」と言われて相談
をやめてしまったこと、隠
そうとするうちに症状が悪
化したり、どもることを見
せまいと授業の発言を一分
からない」と答えることで
評価が下がるなど、悩ん
できた経験を話した。

入試や就職試験の時の面
接に恐怖心を抱いたり、人
前での自己紹介や電話もか
けたくないという本音を明
かしながらも、「自分の話
し方を受け入れ、自信を持
って生きていくことを目標
に実践している」と話し、
「小さな頃から、吃音でど
こでつまづくか説明できれ
ばいいし、困っていること
を話せるようだと楽になれ
る。社会全体が吃音を理解
してくれることが理想だ
が、まずは身近な支援者、
理解者と解決できれば」と、
周囲の理解を呼びかけた。
子どもの会は学年に応じ
て行われ、ゲームを通じた
交流、中学、高校生活に向
けて一緒に考える時間が設
けられたほか、小学5、6
年生と中学生の交流では、
小学生が授業や生活で心配
に思っていることを質問
し、中学生が自分の体験や
考えを基に優しくアドバイ
スする場面もあった。